

東京帝国大学理科大学附属植物園におけるロックガーデンの整備について

The rock garden of the Botanical Gardens attached to Tokyo Imperial University College of Science

西村 公宏*

Kimihiro NISHIMURA

Abstract : The aim of this study is obtain the character of the rock garden of the Botanical Gardens attached to Tokyo Imperial University College of Science (Koishikawa Botanical Gardens). In 1906, Koishikawa Botanical Gardens plan of re-development with beautifully landscaped like a park was decided by Matsumura director. The rock garden shaped like Kew Gardens was almost completed in 1915. The landscape gardening of the rock garden was gradually pushed forward afterwards, and, in 1922, the slope with Kuroboku and spray device on the 2,800 square meters site was made by Nakai gardening chief and Ihara engineer. The rock garden with the slope on both sides of the pathway and 400 kinds of alpine plants was almost completed and was designated as the special observation facilities as well as the greenhouse in 1923.

Keywords: Rock garden, Tokyo Imperial University, Botanical gardens, Jinzo Matsumura, Takenosin Nakai, Kew Gardens

キーワード : ロックガーデン, 東京帝国大学, 植物園, 松村任三, 中井猛之進, キューガーデン

1. はじめに

東京大学大学院理学系研究科附属植物園（東京都文京区白山）は、平成 24(2012)年 9 月 19 日、国の名勝及び史蹟に指定されている。文化庁による「小石川植物園 詳細解説」には、日本初の近代植物園であり、その変化に富んだ地形および多様な植物等による風致景観は観賞上の価値が高く、市民にも公開され長く親しまれてきた国内の代表的な植物園として貴重である。

とあり、主な施設としては、温室や植物分類標本園と共に、山地植物栽培場が記されている¹⁾。この山地植物栽培場については、昭和 30(1955)年 4 月発行の『東京大学理学部附属植物園案内』に、山地植物栽培場 分類標本園に隣接して、鉄条網を張りめぐらした処は、以前大坂室の前面に構築されていた山地植物栽培場を取り払い、その材料を用いて、大正二年松村園長がここに岩石栽培を企てたのに端を発し、年々拡張されて今日のような栽培場となったものである。

とあり、添付の「東京大学理学部附属植物園略図」(図-1)においても園中央やや東寄りの南側斜面に「山地植物栽培場 ロックガーデン」と記されていることから²⁾、ロックガーデンであったことが知られる。近代日本の植物園におけるロックガーデンについては、東京大学大学院理学系研究科附属植物園の前身である東京帝国大学理科大学附属植物園（以下、小石川本園）において、明治 21(1888)年に設けられた築山（山地植物栽培所）や同日光分園（以下、日光分園）において明治 39(1906)年頃に公開された石山が先行事例として指摘されており³⁾、日光分園については、その後の展開についても詳細に跡付けられているが⁴⁾、小石川本園のロックガーデン（山地植物栽培所）については不明な点が多い。

そこで本稿では、大正 2(1913)年より年々拡張されたとされる小石川本園のロックガーデンが、いかなる施設でどのような背景のもとに整備が進められたのかを明らかにしたい。研究の方法としては、ロックガーデン整備の端緒となった大正 2(1913)年に着

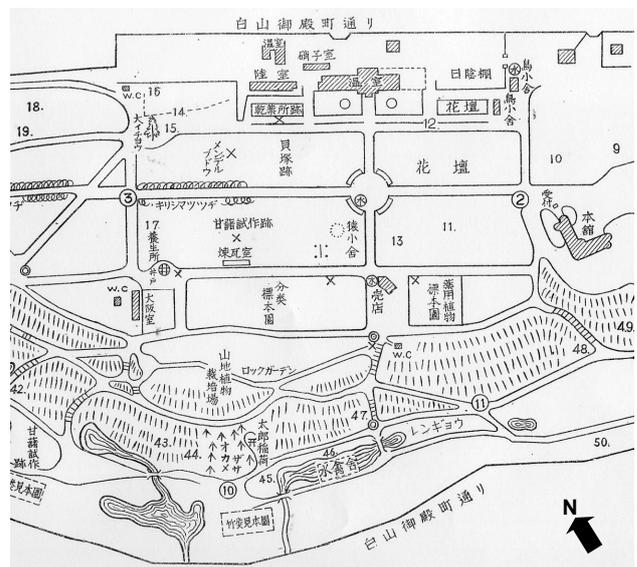


図-1 東京大学理学部附属植物園略図(部分) 昭和 30(1955)年 方位加筆, 縮尺不明

目し、対象期間を明治後期（明治 23(1890)年～同 45(1912)年（大正元年を含む））、大正前期（大正 2(1913)年～同 5(1916)年）及び大正中、後期（大正 6(1917)年～同 15(1926)年）の 3 期とし、それぞれについて、東京大学所蔵の資料等に基づき、まず、小石川本園における施設整備の方針を把握し、次にその中でロックガーデンの整備がどのような位置にあったのかを、背景も踏まえ検証して行くこととする。

2. 明治後期におけるロックガーデンの計画

(1) 分科壇の改良

*茨城県土木部

東京大学文書館所蔵の「東京帝國大學明治三十五年度歳入歳出概算書」の中の「植物園植木室等移築修繕費」には、植物學科用植物園ヲ建設センハ当初豫メ園内各部ノ位置配合ヲ精査確定シ始メテ着手セサル可カラザルモノナルニ現在ノ理科大學附属植物園ハ旧御薬園タルノ施設ヲ変更スルコトナク時々ノ必要ニ應シ漸次ニ其後ヲ經營シ來リタルモノナルカ故ニ園内ノ事物支離錯綜各部適當ノ位置ヲナサハルモノ多ク爲メニ植物ノ性質ニ從テ之ヲ分類移植スルコト能ハズ斯學攻究上ノ障碍少ナカラザリシニ依リ去ル明治二十八年ヲ以テ將來ノ方針ヲ定メテ之カ改良ニ着手シ爾來整頓ノ緒ニ着カントスト雖モ該園ニ於テ最モ緊要部分ニ屬スル分科壇ノ如キ旧來ノ建物即チ唐室、陸室、園丁溜所、及大阪室ノ三棟并ニ物置一棟ノ其要所ニ存在スルヲ以テ今尚ホ之カ改良ヲ施シ難キハ甚以テ遺憾ニ堪ヘサル所ナリ依テ是等建物ヲ速カニ他所ヘ移築シ分科壇ノ改良ヲ遂ケントスレ本年度ニ於テ前記金額ノ臨時支出ヲ要求スル所以ナリ

とあり、旧御薬園をそのまま転用した小石川本園では、明治28(1895)年に将来の方針を定め、園内の改良に取り組んでいたことが知られるのである。そして、明治36(1903)年4月7日付の「植物園交換地ニ係ル道路敷地交換ノ儀」の同の添付図面(図-2)も併せて検討すると、園内中央やや東寄りに唐室や大阪室等が位置し分科壇改良の支障となっていたことが確認できる。なお、この大阪室等が位置していた区画には、前述のように築山(山地植物栽培所)が設けられていたが、その形状については、東京大学大学院理学系研究科附属植物園所蔵の明治中期の築山の写真(写真-1)より、築山置き石によるロックガーデンであったことが知られる。そして、このロックガーデンについても、分科壇の改良の支障となっていたと見て良いであろう。一方、東京大学総合図書館所蔵の明治23(1890)年から同45(1912)年までの「(東京)帝國大學年報」(以下、年報)の「植物園」の記述に当たると、園内の整備については、明治29(1896)年の年報に、温室を新営し、4月からは特別観覧を開始したこと、同30(1897)年の年報には、植物室移築費が年々否決され分科壇の設備を中止せざるを得ないこと、同36年度(明治33(1900)年より年度に変更)の年報には、前年の隣地交換により、適当な苗圃を得たこと等が記されており、将来の方針に基づき、温室の新営、苗圃の確保は実現したが、大阪室等の移転による分科壇の改良は難航していたことが確認できるのである。

(2) 園内の美的整備

東京大学附属総合研究図書館所蔵の明治39年度の年報においては、園内ノ整理ニ関シテハ従来分科壇ニ重キヲ置キタリシガ本邦ニ於ケル斯學ノ進進ハ其必要ノ程度ニ於テ之レガ變更ヲ要スルモノアリ又一方ニハ熱帯植物ヲ應用シテ洋式ノ花壇ヲ設置シ及内外國産諸種ノ植物ヲ美的ニ配置シ又道路ヲ整理シテ観覧者ノ便利ヲ計ル等ノ方針ヲ取り事業ヲ進捗セシメタリとあり、明治39(1906)年に至り、従来の分科壇重視から、内外國産の植物を美的に配置し、道路も整理して観覧者の便利を計る方針に変更し、園内の整備を進めたことが明らかになる。そして、明治40年度から同44年度の年報においても、「園内ノ整理」に関しては「前年度來ノ方針」を進捗させたことが記されており、明治45年度の年報には、園内ノ經營整理ハ前年度來ノ豫定ノ計畫ニ從ヒ着々進捗セシメツアリ藪地ノ開拓花壇ノ増設樹木ノ栽培等面目ヲ一新セル箇所尠カラス殊ニ年度末ニ際シ數年來ノ懸案タリシ高山植物培養地略落成セルニ依リ大ニ風致ヲ添ヘ且ツ該植物研究上多大ノ便宜ヲ得ルコト疑フ容レスとあり、花壇の増設や樹木の栽培が進むと共に、大正2(1913)年3

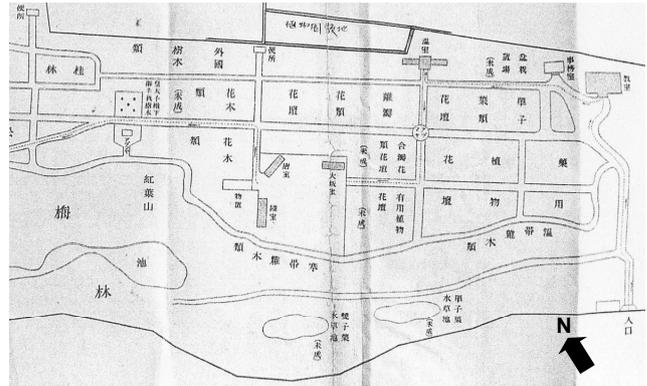


図-2 植物園案内畧圖(部分) 方位加筆, 縮尺不明



写真-1 築山 手前:鉢場 右側:大阪室

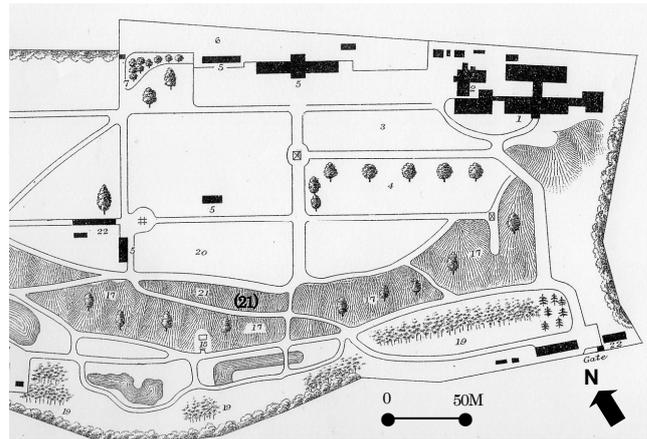


図-3 PLAN OF THE BOTANIC GARDEN (部分) (21) Rock Garden 方位, 縮尺加筆

月までには、数年来の懸案であった高山植物培養地が略落成したことが知られるのである。ここで、「東京帝國大學一覽」(和文)及び“IMPERIAL UNIVERSITY OF TOKYO CALENDAR”(英文)に添付された平面図を探索すると、植物園の平面図の初出は、和文については明治41(1908)年12月発行の「東京帝國大學一覽 從明治四十一年至明治四十二年」、英文については同年3月発行の“IMPERIAL UNIVERSITY OF TOKYO CALENDAR (1907-1908)”であり、後者の添付図面である“PLAN OF THE BOTANIC GARDEN”(図-3)⁵⁾にあたり、前者に添付された「理科大學附属植物園圖」の同じ位置には

「高山植物」と記されていることから⁶⁾、前述の「高山植物培養地」とは図-3のロックガーデン(21)を指していると考えられ、その計画は明治41(1908)年3月までに平面図で示され、数年を経て大正2(1913)年3月までには、築山の材料を用いて略落成したと見ることができよう。

3. 大正前期におけるロックガーデンの竣成

(1) 美的整理の継続

小石川本園では、明治28(1895)年に園内を植物学科用に改良する方針を建てたが、明治39(1906)年に方針を変更し、園内の美的整備を進め、その方針の下、大正2(1913)年3月までに、新しいロックガーデンが略落成したことが明らかになったが、その後の状況について、東京大学文書館所蔵の「東京帝國大學年報(草稿)」(以下、年報(草稿))により辿ると、大正2年度の年報(草稿)には、

園内ノ経営整理ニ就テハ既定ノ方針計畫ニ準拠シ着々進捗シメツアリ去ル明治四十五年度ニ於テ温室一部ノ修繕ヲ了セシガ當ニ年度ニ於テ残部ノ修繕ヲナシテ殊ニ本修繕ニ於テ温室ノ中央室ヲ従来ヨリ六尺高く改築セシ爲メ外觀ノ美ヲ増シタルノミナラス熱帯植物ノ生長發育上多大ノ効果ヲ収ムルコトノ信ス

とあり、外観の美も踏まえた温室の改築がなされたことが知られ、大正3年度の年報(草稿)には、

園内ノ経営整理ニ関シテハ既定ノ方針ニ據リ着々進捗シツアリ即チ薬用花壇分類花壇並ニ有用花壇ノ整理ヲ行ヒ殊ニ薬用花壇ハ現下ノ趨勢ト需要トニ鑑ミ大ニ拡張整理ヲ企テツアリ又高山植物培養地ハ前年其一半ヲ竣成セシカ本年度ニ於テ残部ノ大部分ヲ竣成シ盛ニ高山植物並ニ山草等ヲ栽培シツアリ又園ノ西北隅ニ鬱蒼トシテ繁茂シツアル松柏類ノ移植ヲ行ヒ一見別天地ニ入ルノ観ヲ呈セシメタリ

とあり、大正3(1914)年には、花壇等の整備と共に、高山植物培養地についても整備がさらに進み、大正4(1915)年3月にはほぼ竣成したことが明らかになるのである。さらに、大正4年度の年報(草稿)には、

園内ノ経営整理ニ関シテハ既定ノ方針ニ據リ着々進捗シツアリ前年来薬用花壇分類花壇有用花壇ノ整理ヲ行ヒシカ大部分其緒ニ就キ斯学研究者ヲシテ大ニ裨益スル所アラシム尚前年来ヨリ着手シツアリシ樹木移植等モ本年度ニ至リテ益々好結果ヲ来シ樹木ノ生育発達ハ勿論ナレドモ風景モ亦最ツテ一層ノ佳趣ヲ加ヘ一段ノ美観ヲ呈スルニ至レリ

とあり、花壇の整備や樹木の移植が着実に進み、風景も一層の佳趣を加え一段の美観を呈していたことが記されている。これらより、園内の美的整理は大正初期においても継続され、その一環としてロックガーデン(高山植物培養地)の整備も進められ、大正4(1915)年3月までに竣成したことが確認できるのである。

(2) 竣工時のロックガーデン

東京大学文書館所蔵の大正4年度の年報(草稿)には、数年前ヨリ本園ノ沿革ノ調査ニ着手シ来リシカ本年度ニ至リテ大略完成ヲ告グルニ至レリ之ニ附属セル沿革図並ニ現在ノ本園案内図ヲ印刷シ付シ来観者ニ販賣シツアリ

とあるが、この案内図は、大正12(1923)年発行の『東京帝國大學理學部附属植物園案内』(以下、『植物園案内』)に

室田老樹齋編 植物園一覽圖及沿革誌参考圖 大正四年十一月發行

と記されていることから⁷⁾、室田による一覽図であると考えられる。そこで、文京ふるさと歴史館所蔵の「植物園一覽圖及沿革誌参考圖」(図-4)に当たると、園内中央やや東寄り南側の斜面に位置するロックガーデンに沿った園路については、図-3とほぼ

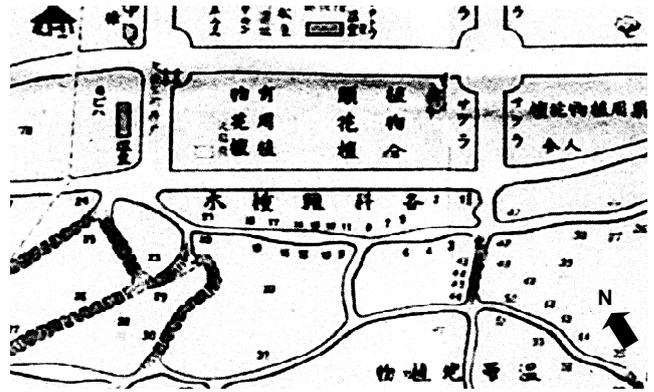


図-4 植物園一覽圖及沿革誌参考圖(部分) 方位加筆、縮尺不明

同様の形状のものが確認できるが、ロックガーデンに該当する部分には「各科雑種木」とあるだけで、ロックガーデンもしくは山地植物栽培所の表示は見られず、記載されている植物も高山植物ではなく「ロウバイ」や「ヒュウガミズキ」等の低木である。したがって、ロックガーデンは、既定の方針により大正4(1915)年3月までにほぼ竣成したものの、まだ特記に値する観賞施設にはなっていないのではないかと推察されるのである。

ちなみに、ロックガーデンについては、図-3、図-4より、園内中央やや東寄り南側の斜面に位置する緩いカーブの約100mの園路に沿って約1,100㎡の横長の区画が設けられていたことが確認できるが、この区画は、図-2においては「寒帯雑木類」とあり、前述の『植物園案内』には、

傾斜地ノ一帯、夏ハ緑蔭日光ヲ遮リテ、涼風自ラ生ジ、冬ハ落葉散リ布キテ、閑寂ノ興趣アリ。

とあることから⁸⁾、寒帯の植物を育てるのに適した涼しい場所であったと見て良いであろう。

そして、昭和15(1940)年発行の『東京帝國大學理學部植物學教室沿革』によると、明治41(1908)年12月、東京帝國大學理學部の大学院生であった中井猛之進は同学の助手として植物園勤務を命じられ、入営期間(明治42(1909)年12月~同43(1910)年11月)を除いて、大正6(1917)年12月まで勤務していたことが知られ⁹⁾、一方、昭和17(1942)年発行の『東京帝國大學學術大觀 理學部』には、

小石川植物園…大正3年中井猛之進が園藝主任を命ぜられてから、…山草栽培所等を完成した。

とあることから¹⁰⁾、大正前期におけるロックガーデンの整備は、主に中井が担当したのではないかと考えられるのである。

(3) キューガーデンのロックガーデン

すでに見たように、最初に小石川本園に設けられたロックガーデンは築山であり、日光分園の場合は石山であった。松村はどのようにして、園路に沿った横長の区画のロックガーデンを考案したのであろうか。松村が明治39(1906)年5月から同40(1907)年2月まで欧米の植物園等を視察し、イギリスの代表的な植物園であるキューガーデンの概要を、明治40(1907)年2月9日付の「讀賣新聞」や同年7月発行の「東洋學藝雜誌」(310号)に掲載された「英國植物園の話」で紹介したことはすでに指摘されているが¹¹⁾、読売新聞の記事に掲載された写真「キウウ植物園内の高山植物園」と1900年発行の写真集“Illustrations of the Royal Botanic Gardens, Kew, from photographs taken by permission, by E. J. Wallis.”の中の“Rock Garden”(写真-2)は同様の図柄であり¹²⁾、この写真及びその解説さらに写真集の再版に掲載されている平面図“ROYAL BOTANIC GARDENS KEW”(図-5)より¹³⁾、キューガーデンのロックガーデンは、1882年、園内北東の横長の区画に整備がなされ、緩いカーブの514フィート(約156m)の

やや掘り下げた園路の両側に、高山植物を植込んだ石の斜面が配され、その背後が樹林帯になっていること等が確認でき、小石川本園のロックガーデンとの一部類似点が指摘できよう。

また、松村は、「英國植物園の話」において、ロンドンに程近き、サーレー州、キューなる、ロイヤル、ボタニック、ガーデンズのヘルバリウムに入らんと志し、…五箇月程、ここに暮しました。…廣大なる園には、植物の種類も極めて多く、落葉大樹の森林もあれば、常盤木の並木もあり、松柏林あり、竹林あり、薔薇園、石南花園、伊太利園、高山園、草本園、有用園といふ如く、自ら分類もあれば、概して公園的にして、池には水禽を棲ませ、山には孔雀を放飼とせり、此等の鳥類は人になれて、餌をやれば来り集る、公德あるの民之を逐ふことなし。園は見渡す限り、盡く緑色の芝生にして、冬尚青く。…英國の公園植物園共に他の國のに比すれば、自然景に近く、…家屋建築の設計裝飾至て質素にして、古びたるを尊び、自ら雅致あり、植物園の施設また斯くの如し、…王室の小菓園に起りて、古き歴史を有しながら、國の發展と共に發展して、益々盛大となれり、自然に放任して、自然に發達せりとあり¹⁴⁾、松村は、キューガーデンに5か月間滞在し、森林、並木、薔薇園、そして高山園（ロックガーデン）も有するキューガーデンに感銘を受けたことが窺え、このことが、小石川本園における横長の区画のロックガーデンの整備に結びついたのでないかと推察されるのである。

4. 大正中、後期におけるロックガーデンの改修

(1) 入園者の激増

東京大学文書館所蔵の大正6年度の年報（草稿）には、本園ニ於テハ常時植物園本来ノ目的ヲ達成セシコトヲ勉メ樹木花壇等ハ常ニ移植栽培手入整理ヲ行ヒ以テ斯學研究ノ便ヲ図リ傍ラ一般入園者ヲシテ天與ノ樂園タルノ感ヲ深カラシメシコトヲ期セリ從テ近來本園ノ價值漸ク世上一般ニ認メラルルニ至リ…入園者ノ數異常ナル率ヲ以テ増加シ四五ノ両月ハ勿論十一月ノ頃ニ於テモ屢々四五千以上ノ入園者ヲ見ルニ至レリ唯憾ムラクハ上下人士ノ公德心全ク缺如スル者多ク樹木ノ枝梢ヲ折損シ花壇ノ花卉類ヲ窃取シ乃至ハ各植物指示ノ木札ヲ破毀又ハ抜き取ル等ノ被害頻々トシテ枚擧ニ遑アラサルハ実ニ痛嘆ニ堪ヘサル次第ナリ

とあり、「天與ノ樂園」となった園内には多くの人々が集うこととなったが、その中には公德心を欠いた来園者も現れ、対応に苦慮していたことが知られるのである。そして、大正9年度の年報（草稿）には、

本園八年々入園者ノ劇増スルニ從ヒ歳入モ共ニ増加シ且ツ之ニ伴ヒ諸般ノ施設二年逐年急ヲ要スルモノ多ク從ツテ從來豫算ハ理學部内ニ包容セラレタレドモ近年豫算ノ分立ヲ必要トスルノ機運熟セルニ依リ本年度ヨリ理學部ヨリ分立セリ 巡視見張所一棟ヲ園内枢要ノ地ニ建設シ花壇保存ノ便ニ供シ又便所、休憩所各一棟ヲ建ケテ觀覽人ノ便ヲ図リ井戸ヲ改修シテ植物ノ灌水ニ利シ外圍ヲ鐵筋コンクリートニ改築シ且ツ之ヲ年々ノ繼續工事トシテ追々全部ノ改修ヲ了ヘント欲ス

とあり、歳入の増加に伴い、独立した予算を有するに至り、激増した入園者に対応した新たな施設整備に着手したことが知られるのである。

ちなみに、「年報」等に記された小石川本園の入園者数を、集計が年から年度に替わった明治33年度より関東大震災前の大正11年度までをまとめたのが表-1である。この表より入園者数は、明治39年度まで順調に増加していたが、翌年度より減少に転じ、同43年度より再び増加し始め、大正5年度以降は急激な増加に転じたことが知られ、特に大正5年度と大正11年度では2.48倍



写真-2 Rock Garden

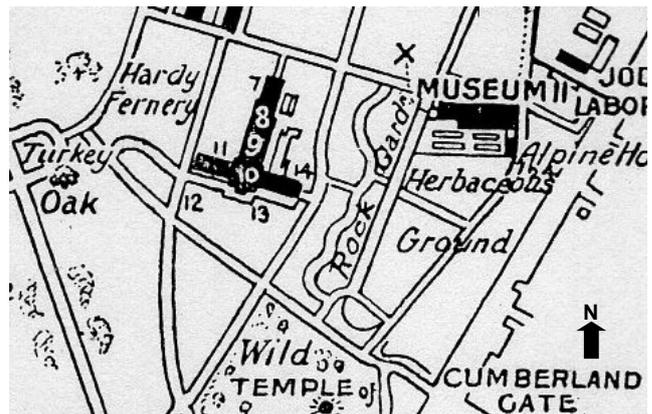
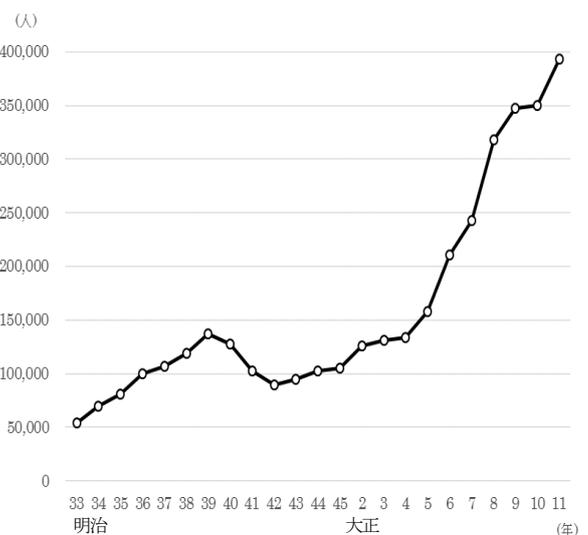


図-5 ROYAL BOTANIC GARDENS KEW (部分) 方位加筆、縮尺不明

表-1 小石川本園来園者数 (1900~1922)



(392,869人/157,943人)の増加となっていたことが確認できるのである。

(2) クロボクと給水施設

このような状況の中、大正11(1922)年5月16日付の「東京朝日新聞」には、お花畑さながらの新しい眺め 中井博士の苦心で高山植物を都に移植の試み…小石川の植物園に今年七月から日本アルプス

の幽邃な渓谷を偲ばせるやうな高山植物の見事な花畑が出来る
 由来同植物園は學術の研究所だけに温帯植物は場内一面日本産
 は云はずもあれ外國の珍しいもの迄千數種も栽培され、熱帯
 植物は温室を覗けば豊富に觀られるが惜しい事にこれまで寒帯
 植物を全く缺いて居た、これでは最高學府の附屬植物園として
 不完全の謗を免れぬと四年越東大植物學科の懸案であつたのを
 今年に入って早々理學部の貧乏な豫算の中から五千圓を割き中
 井理學博士が考案し青木甘藷先生の碑のある丘から下へ百間餘
 りの崖を開いて兩側に甲斐の山奥から高山植物の育つに適する
 黒石を据ゑ斜めな岩道としてその上に之も遠いヒマラヤやアル
 プスに産する高山植物の種子を伊多利、獨逸の大學から取寄せ
 日本のは信州御嶽或は日光に理學部の學生を派遣して採集させ
 たものゝ中極めて珍しいものを三百餘種植付けた

とあり、大正 11(1922)年に至り、中井の考案によりロックガー
 デンの改修が行われたことが明らかになる。「これまで寒帯植物を
 全く缺いて居た」、「四年越東大植物學科の懸案」といった記事か
 らは、大正 4(1915)年 3 月までに竣成したロックガーデンにおけ
 る高山植物の栽培は、必ずしも順調ではなく、入園者の激増にも
 対応すべく、さらなる施設整備が望まれていたのではないかと推
 察されるのである。

ところで、斜面に据ゑる石として「高山植物」の生育に適する
 「黒石」(クロボク)を用いていることも注目されよう。ここで、
 明治、大正期における植物、園芸、庭園関係の出版物を探索する
 と、明治 38(1905)年 8 月に千山萬水が著した『園藝文庫別巻 草
 木栽培全書』に、

高山植物の培養に着眼すべき第一要點である…排水を良好な
 らしむるには、植場所を高くせねばならぬから、其處で假山と
 なる、假山ならば、高山の状態に照して、石山とするは自然の
 數である。偕石山はどうするかといふ、高山にある岩石を持って
 来るといふ事は出来ぬから、輕便なところで黒岩(くろぼく)
 といふ事になる。

とあり¹⁵⁾、明治後期においては、ロックガーデンの材料としてク
 ロボクが取り上げられていたことが知られ、さらに、大正 9(1920)
 年発行の「庭園」(6)には、「高等園藝學校見物記」が掲載されて
 おり、

校舎前の道路に出た。此處にはクロボクを主として使つたロッ
 クガーデンがある。面積と巧みに於てこれ程のものは中々見
 られないやうに思つた。岩の間に植込まれた高山植物なども珍
 しかつた。

と記されていることから¹⁶⁾、大正期においては、クロボクによる
 ロックガーデンの整備事例も見られるようになり、小石川本園の
 ロックガーデンの改修も、同様の事例と見ることができよう。

そして、前述の「東京朝日新聞」の記事には、

此の儘では樹の間を洩れる微かな日光にも鋭敏な感覚の高山植
 物は直ぐ枯れるので苦心慘憺の結果新しく八尋の深さに掘つた
 角井戸から氷のやうに冷たい水を電氣モーターで汲み上げタン
 クに装置した送水機の作用で黒石の下に隠して敷いた鐵管の小
 孔からその水を絶えず霧と降らせる、工事は一切帝大工學部の
 井原技師が引き受け既に設計は九分通り成就して數々の高山植
 物が繊細な葉を戦がせ乍ら濡れた黒石の坂途を綺麗に飾つてあ
 る此の高山園が開放される七月上旬には眼も鮮やかに壺堊、柳
 櫻、紅葉草など小さくて美しい花が無數に咲き亂れ觀ただけで
 涼しさを覚えるほどの風致に成るであらう、此寒帯地らしい氣
 分を損はぬため池畔にある電氣モーターの置屋も樺太ギリヤーク
 土人の掘立小屋に模して風流に建てられてある。

とあり、記事と共に掲載された「植物園に取寄せた高山植物」(写
 真-3)からは、園路に沿ったクロボクの法面に繁茂した高山植
 物を確認することができるのである。



写真-3 植物園に取寄せた高山植物(大正 11 年 5 月 16 日 東京朝日新聞)

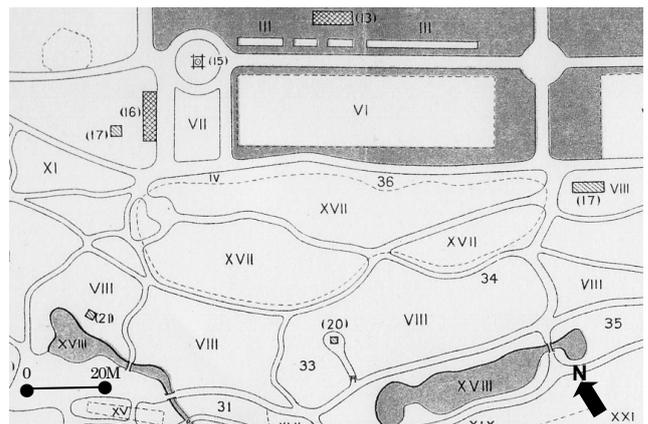


図-6 東京帝國大學理學部附屬植物園一覽圖(部分)
 点線内(XV II): 山地植物栽培所 (21) 給水唧筒小屋 方位、縮尺加筆

表-2 昭和貳年參月末日現在 國有財産調 植物園

名 称	数量	價格(円)	竣 工	備 考
唧筒小屋	1.5 (坪)	621.58	大正 11 年 3 月 31 日	新築・雑屋建 木造平家建
水 槽	3	97.34	大正 11 年 3 月 31 日	新設・貯槽
給水装置	1	969.41	大正 11 年 3 月 30 日	新設・原動装置 (アボロ式)
水 道	1	1,160.95	大正 11 年 3 月 30 日	新設・水道 (アボロ式) 屋外

また、大正 12(1923)年の『植物園案内』には、
 小徑ト臺地トノ間ニ約五百坪ノ地ヲ占メテ山地植物栽培所アリ…近時漸ク完成ニ近ツキタリ。現時ハ崖下ノ窪地ニ井戸ヲ穿
 ち、電力ヲ用ヒテ其水ヲ水槽ニ汲上げ、水ハ鉛管ヲ通ジテ此區
 劃ヲ一周シ、噴霧作用ニ依リテ、岩地全體ニ灌水スル装置ヲ施
 セリ。岩石ノ間隙ニハ、アルプス、ヒマラヤ、ロッキー等ノ諸
 高山ヲ首メ、西比利亞、滿洲、朝鮮、本州、北海道等ノ山地植
 物四百餘種ヲ栽培セリ。

と記されており、添付されている「東京帝國大學理學部附屬植物
 園一覽圖」(図-6)¹⁷⁾及び前述の記事(写真-3)も併せて検
 討すると、改修後のロックガーデンは、緩いカーブの園路の両側
 の斜面に高山植物の栽培に適したクロボクを据ゑるために、南側
 に一部区画を拡張し、園路も一部付替えを行い、横長の区画は約

2,800 m²、園路も約120mとなり、さらに区画を1周する形で鉛管の給水装置が配され、クロボクの斜面においては、アルプス、ヒマラヤ、本州及び北海道等の高山植物約400種の栽培が行われていたことが明らかになる。

なお、給水装置の設置を担当した井原とは、「大正十年十一月一日調 文部省職員録」より東京帝国大学営繕課技手井原寅松であると考えられる¹⁸⁾。また、東京大学文書館所蔵の「昭和貳年参月末日現在 國有財産調」の給水装置に関する内容をまとめたのが表-2であるが、この表より、給水装置や水道は大正11(1922)年3月30日に、唧筒小屋や水槽はその翌日に竣工したことがわかる¹⁹⁾。

そして、東京大学文書館所蔵の「大臣准允 自大正九年 至大正十三年」に綴られている大正12(1923)年4月11日付の「理學部附屬植物園觀覽規則改正ノ件」には、

通常觀覽券…一枚金貳拾錢 特別觀覽券(温室觀覽券山草栽培所觀覽券及其他)各一枚 金五錢…山草栽培所及其他ノ特別觀覽ハ隨時之ヲ許可ス

と記されており、この件は同年6月19日付で許可になっている。

小石川本園のロックガーデンは、大正11(1922)年の改修により、翌年から温室と同様の特別觀覽施設となったのである。

5. おわりに

本稿では、明治後期、大正期における東京帝国大学理科大学附屬植物園(小石川本園)における施設整備の内、特にロックガーデンに着目し、整備内容及びその背景について検証した。小石川本園初代園長松村任三は、明治28(1895)年に園内を植物学科用に改良する方針を建てたが、明治39(1906)年に方針を変更し、園内の美的整備を進めることになり、明治41(1908)年3月までには、園内中央やや東寄りの南側の斜面にある緩いカーブの約100mの園路沿いに、横長で約1,100 m²のロックガーデンの計画地を定め、大正2(1913)年3月に略落成、同4(1915)年3月までには竣成したこと、主な担当は園芸主任中井猛之進であったこと、ロックガーデンが築山ではなく、横長の区画であったことについては、松村が5か月間滞在したキューガーデンの影響が窺われること、そして、大正中、後期には、入園者の急激な増加が見られたが、大正11(1922)年にはロックガーデンの改修が行われ、緩いカーブの約120mの園路の両側の斜面には高山植物の栽培に適したクロボクが据えられ、アルプス、ヒマラヤ、本州及び北海道等の高山植物約400種の栽培が行われ、また、約2,800 m²に拡張した横長の区画には1周する形で鉛管の給水装置が配されたこと、主な担当は中井であったが、給水装置については営繕課技手井原寅松が担当したこと、さらに、大正12(1923)年にロックガーデン(山地植物栽培所)は、特別觀覽施設になったこと等を指摘した。

小石川本園のロックガーデンは、温室や花壇等と同様、園内を美的に整備する方針の中で、その整備が進められたと位置付けることができるが、現在、小石川本園では、基礎の一部保存等、歴史性を踏まえた公開温室の更新が進められている²⁰⁾。ロックガーデン(山草栽培所)についても、その歴史性を踏まえた在り方の検討が必要なのではないかと考えられるのである。

謝辞：本研究を進めるに当たり、下記の機関等の方々より、多大なご支援を賜りました。ここに感謝の意を表します。

東京大学附屬植物園、同文書館、同附屬図書館、同施設部、千葉大学園芸学部戸定会、文京ふるさと歴史館、土庄町立中央図書館、Royal Botanic Gardens, Kew

補注及び引用文献

- 1) 文化庁文化財部(2012)：新指定の文化財：月刊文化財(588), 10-11
- 2) 東京大学理学部附屬植物園(1955)：東京大学理学部附屬植物園

案内：同園, 10, 添付図

- 3) 西村公宏(2015)：創設期の東京帝国大学附屬植物園日光分園におけるロックガーデンの整備について：ランドスケープ研究78(5), 449-454
- 4) 西村公宏(2016)：拡充期の東京帝国大学附屬植物園日光分園におけるロックガーデンの整備について：ランドスケープ研究79(5), 443-448
- 5) TOKYO IMPERIAL UNIVERSITY (1908)：TOKYO IMPERIAL UNIVERSITY CALENDAR 2567-68(1907-1908), 巻末図
- 6) 東京帝國大學(1908)：東京帝國大學一覽 從明治四十一年 至四十二年, 同學, 巻末図
- 7) 東京帝國大學(1923)：東京帝國大學理學部附屬植物園案内：同學, 3
- 8) 東京帝國大學(1923)：前掲書, 23
- 9) 小倉謙 編(1940)：東京帝國大學理學部植物學教室沿革：東京帝國大學理學部植物學教室, 184, 186, 188, 203
- 10) 東京帝國大學(1942)：東京帝國大學學術大觀 理學部：同學, 258
- 11) 西村公宏(2016)：前掲書
- 12) E. J. Wallis (1900)：Illustrations of the Royal Botanic Gardens, Kew：London E. Wilson, Rock Garden
- 13) 再版については、解説の中に出てくる年号が1905年までなので、1906年以降の発行と推察される。
- 14) 松村任三(1907)：英國植物園の話：東洋學藝雜誌(310), 236-247
- 15) 千山萬水(1905)：園藝文庫別卷 草木栽培全書：春陽堂, 114, 115
なお、千山は同書の中で、「友人の野草居君」の論説として、幾何學的に出來た外國風の庭、山水風に造つた東洋の庭、いづれもそれに取添た家屋の建築に調和して、それぐ一種の美を成して居る。…處でこの二種の庭園の外に、純然別種の庭園がある、それは即ち高山植物ばかりで庭を造るので、英語ではロックガーデンと稱へてあるが、意譯すれば高山園とでも言つたらよからう、…中央を川の様に、少くも一尺八寸以上掘下げて、左右をば斜面の崖模様として置く。
と記しており、園路の両側に斜面を設けるロックガーデンを紹介していることは注目されよう。
- 16) 一記者(1920)：高等園藝學校見物記：庭園(6), 28-30
文中に「松戸驛で下車」とあるので、「高等園藝學校」とは千葉県立高等園芸学校(現千葉大学園芸学部)であることが知られる。
- 17) 東京帝國大學(1923)：前掲書, 10, 添付図
- 18) 文部大臣官房秘書課(1921)：大正十年一月一日調 文部省職員録, 同課, 92
- 19) 同様な施設は、ほぼ同時期のキューガーデンにも設けられていたようで、八代田貫一郎が昭和4(1929)年9月発行の「實際園藝」に掲載された「英國皇立植物園キウ・ガードゥンの話」に、
高山植物園 ビレネ山脈中の溪谷を模す計畫であつたが、費用の関係で平地より約一-二間の溝の両側に、岩を配置してある。用岩は植物の各種それぐに適する様、チェダー石灰岩、グロスター洲の綿石等が用ひられて居る。水道管が両側の頂部を南北に走って居り、二間毎位に噴水して霧を四周に散らして、高山の氣象を模してある。
と記されている。
八代田貫一郎(1929)：英國皇立植物園キウ・ガードゥンの話：實際園藝, 29-33
ちなみに八代田は、大正14(1925)年に植物研究生としてキューガーデンに在籍している。
小豆島ネイチャークラブミニ地球館作成の八代田貫一郎年譜(土庄町立中央図書館所蔵)による。
- 20) 小石川植物園後援会事務局(2016)：公開温室の更新、塀の改修の現状：ニューズレター(52), 4, 5